

## 山村地域における高齢者の存在形態と地域おこしの 課題：大分県上津江村の高齢者調査の分析

中村, 綾  
上津江村役場開発課(現)

佐藤, 宣子  
九州大学大学院農学研究院

<https://doi.org/10.15017/14838>

---

出版情報：九州大学農学部演習林報告. 83, pp.63-77, 2002-03-27. 九州大学農学部附属演習林  
バージョン：  
権利関係：

論文

## 山村地域における高齢者の存在形態と地域おこしの課題

～大分県上津江村の高齢者調査の分析～\*

中村 綾\*\*・佐藤 宣子\*\*\*

### 抄 録

山村社会は急速に高齢化が進行している。山村問題研究において、高齢化は様々な問題発生の原因として捉えられ、高齢化率の高さは地域活力の低下指標として用いられている。しかし、一方で高齢者は農林業生産の実質的な担い手である。また、農産加工や伝統文化などの地域資源を活かした山村振興において重要な役割を果たしており、高齢者に視点を据えた実態把握が課題となっている。本稿では、高齢化率が35%となっている大分県上津江村を事例にして、山村地域における高齢者の存在形態を典型的に分析した。統計的には65歳以上を高齢者として一元的に捉えているが、前期高齢者(65～74歳)と後期高齢者(75歳以上)で就業形態が違い、世帯構造によって副業への取組方や収入の位置づけも異なっていた。年金以外の収入源としては、男性は林業賃労働、女性は農産物の産直販売が重要である。しかし、高齢者のみでは農林地の資源管理は困難となっており、その受け皿作りが早急に求められている。

キーワード：山村、高齢化社会、産直、地域おこし、資源管理

### 1. 山村の高齢化社会研究と本稿の課題

日本社会は現在、急速に高齢化社会に向かっている。全国国勢調査が開始された1920年(大正9年)から高度経済成長が始まるまでは65歳以上の高齢者は全人口の約5%で推移していたが、その後年々比率が高まり、先の2000年国勢調査では17.3%となった。山村地域では高度経済成長以来の青壮年層の人口流出と少子化によって、一段と高齢化が進行しており、既に高齢化率が30%を超えている町村も少なくない状況である。高齢者夫婦二人や高齢者単独世帯の増加も顕著である。

こうした中で近年、介護保険の導入もあり、山村の高齢者を対象とした社会的な研究

---

\* Nakamura, A., Sato, N.: An Existence of the Aged and Issues of Rural Development in Mountain villages: Survey on the Aged of Kamitsue Village in Oita

\*\* 現在 上津江村役場開発課

Section of Rural Development, Kamitsue village office, Oita 877-0311

\*\*\* 九州大学大学院農学研究院森林資源科学部門森林機能制御学講座

Division of Forest Environment and Management Sciences, Department of Forest and Forest Products Sciences, Faculty of Agriculture, Kyushu University, Fukuoka 812-8581

が活発化している（井岡，1997；染谷，1997など）。山村型介護システムや病院，交通手段，買い物先の確保などの福祉政策及び別居子との関係等の調査分析が進められている。その上で，多くの高齢者が希望している，生きてきた地域を終の住処とするための条件と課題について議論されている（玉里，1998）。また，農業経済の分野では農業就業構造の中で定年帰農が大きな流れとなっているのを受けて，高齢者農業に焦点を当てた研究が始まっている（井上，2001など）。

しかし，林業経済分野における山村研究では，高齢化率を地域活力の低下指標として，枕詞的に「高齢化率何％」と表現されてきたにすぎない。高齢者自身を対象とした就業，生活の分析を通じた森林管理や山村問題へのアプローチは，これまで行われていない。現在，若壮年層の流出と他就業化の進展によって，高齢者は山村において農林業生産の実質的な担い手である。また，経済のグローバリゼーションが進行する下で，農産加工や伝統文化などの地域資源を活かした山村振興が課題となっているが，そこでも高齢者が有する知恵と技能が必要とされている。

本稿では，大分県上津江村を事例として，第一に，山村における高齢者の存在形態を家族形態及び年齢（前期高齢者と後期高齢者）に分けて分析する。第二に，上津江村の高齢者にとって重要な就業であり，生活の一部となっている林業労働と農産物産直の実態について明らかにし，高齢化社会を迎える山村の地域おこしの課題について検討した。

## 2. 高齢化の実態と高齢者調査の方法

### 2.1. 上津江村における高齢化の実態

上津江村は，大分県の北西部，九州における最大河川である筑後川の最上流に位置し，日田林業地の一角にある林業が盛んな村である。林野率92%，その大半が民有林であり，人工林率は87%である（当村の経済については，佐藤，2001）。

2000年の人口は1,308人，うち34.5%が65歳以上の高齢者である。表1は1965年以降の年齢階層別人口を示している。この間，人口は3,040人から57%減少している。15歳未満者は90年代前半に一旦は回復の兆しを見せたものの，65年の1,141人から2000年には183人へと減少している。一方，65歳以上の人口割合は一貫して上昇，実数では，85年までは200人台であったが，その後人数も増加している。とりわけ，90年代後半は95年の386人（27.4%）から2000年には451人（34.5%）と急増している。そのため，現段階は少子高齢化現象だけでなく，15～64歳のいわゆる生産年齢人口も95年の804人（57.1%）から674人（51.5%）へと減少するという段階に至っている。こうした中で，村は若者が魅力を感じる職場作りや新規就農者の受入を進めると共に，保健センターと在宅介護支援センターの開設，及び村営病院も含めた施設「やすらぎ苑」建設（1996年），集落の枝道まで入るタクシー方式の村営バスの運行（1999年），シルバー人材派遣事業（2000年）など高齢化社会に対応した施策に着手している。

表2は2000年における世帯人員数別の世帯数及び人数を示している。494世帯の半分以上，人口では三割強が単独ないし2人暮らしである。かつて，山村では当たり前であった多世代型世帯が減少し，小世帯化が進行していることがわかる。上津江村の場合，小世帯化はこれまでの過疎化の結果であると同時に，独身者Iターン者や新規就農者の受入，及

表1 人口の年齢区分別推移  
Table 1. Change of population by age

(単位:人,%)

| 年    | 総 数   |                 | 15歳未満 |      | 15～64歳 |      | 65歳以上 |      |
|------|-------|-----------------|-------|------|--------|------|-------|------|
|      | 人 数   | 推 移<br>(65年100) | 人 数   | 構成比  | 人 数    | 構成比  | 人 数   | 構成比  |
| 1965 | 3,040 | 100.0           | 1,141 | 37.5 | 1,645  | 54.1 | 254   | 8.4  |
| 1970 | 2,254 | 74.1            | 713   | 31.6 | 1,304  | 57.9 | 237   | 10.5 |
| 1975 | 1,768 | 58.2            | 429   | 24.3 | 1,093  | 61.8 | 246   | 13.9 |
| 1980 | 1,560 | 51.3            | 262   | 16.8 | 1,045  | 67.0 | 253   | 16.2 |
| 1985 | 1,535 | 50.5            | 239   | 15.6 | 1,005  | 65.5 | 291   | 19.0 |
| 1990 | 1,475 | 48.5            | 214   | 14.5 | 919    | 62.3 | 342   | 23.2 |
| 1995 | 1,407 | 46.3            | 217   | 15.4 | 804    | 57.1 | 386   | 27.4 |
| 2000 | 1,308 | 43.0            | 183   | 14.0 | 674    | 51.5 | 451   | 34.5 |

資料:1965～2000年度版「国勢調査」より作成

表2 世帯人数別にみた高齢者の分布  
Table 2. The spread of the aged population by family size

(単位:世帯数,人数,%)

| 世帯員数         | 世帯数 (構成比) |         | うち高齢者の<br>親族がいる | 高 齢 者<br>のみ世帯 | 人 数 (構成比) |         | うち高齢者 (構成比) |         |
|--------------|-----------|---------|-----------------|---------------|-----------|---------|-------------|---------|
|              |           |         |                 |               |           |         |             |         |
| 1人           | 116       | (24.6)  | 48              | 48            | 116       | (8.9)   | 48          | (10.6)  |
| 2人           | 154       | (32.6)  | 112             | 64            | 308       | (23.5)  | 176         | (39.0)  |
| 3人           | 87        | (18.4)  | 62              | ?*            | 261       | (20.0)  | 93          | (20.6)  |
| 4人           | 47        | (10.0)  | 22              | ?*            | 188       | (14.4)  | 35          | (7.8)   |
| 5人           | 29        | (6.1)   | 21              | -             | 145       | (11.1)  | 36          | (8.0)   |
| 6人           | 20        | (4.2)   | 15              | -             | 120       | (9.2)   | 29          | (6.4)   |
| 7人以上         | 19        | (4.0)   | 16              | -             | 140       | (10.7)  | 27          | (6.0)   |
| 一般世帯以外の施設等** | -         | -       | -               | -             | 30        | (2.3)   | 7           | (1.6)   |
| 計            | 472       | (100.0) | 296             | 137+α         | 1,308     | (100.0) | 451         | (100.0) |

資料:2000年国勢調査

注:1) 一般家庭3人以上で高齢者のみ世帯数は不明である。

2) 「一般世帯以外の施設等」とは寮や寄宿舎,病院への入院者,老人施設入所者などである。

び村営住宅建設による後継者世代の別居などによって高齢者のいない1人,2人世帯が多いことが特徴である。451人の高齢者についてみると,39%の176人が2人世帯,次いで3人世帯が93名(21%),独居48名(11%)である。4人以上の世帯を合わせると127人(28.2%)であり,高齢者の三割に満たない。

## 2.2. 高齢者の農業就業状況

1995年農業センサス時における男女別年齢別に農業就業状況を見ると,男性では65～69歳の割合が最も多く,世帯員数の71.4%が農業に就業している。70～74歳,75歳以上もそ

れぞれ64.3%, 64.7%となっている。女性では70～74歳の割合が最も多く、85.2%が農業を行っている。60～64歳、65～70歳もそれぞれ76.2%, 69.4%となっている。高齢者では農業が主要な就業となっている。また、総数で見ると男性は36.5%, 女性は52.4%となっており、女性の方が農業就業率は高いことが特徴であった。

また、林業においては1990年に第三セクター「トライウッド」が設立され、若い担い手確保が図られているが、95年国勢調査時点において林業就業者数は約200名に上り、その多くは男性高齢者である。

### 2.3. 分析及び調査の方法

以上のような、現段階における高齢化の進展を踏まえ、高齢者を家族形態によって多世代夫婦家族（A型）、一世代夫婦家族（B型）、独居（C型）の三タイプに分けて考察する。また、高齢者を65歳以上として一括に論じるのではなく、高齢者を年齢によって分けて考察することが求められる。本稿では、65～74歳を前期高齢者、75歳以上を後期高齢者として、以下考察する。

調査は上津江村第四次総合計画策定に際して実施された「農林家・高齢者世帯基礎調査」（2000年4月、以下「世帯調査」と略する）及び高齢者副業調査（2000年9～10月、以下「副業調査」と略する）を用いる。「世帯調査」は村の総合計画作成のため、村企画課において様々なタイプの世帯を任意に調査対象世帯として選定、30世帯の聞き取り調査を実施したものであり、うち65歳以上の高齢者がいる世帯は20戸であった。「副業調査」は、農産物の産直販売に取り組んでいる女性5名、林業労働及び不在村所有山林の管理を担当している男性6名について聞き取り調査を実施した。

## 3. 山村における高齢者の存在形態～「世帯調査」の結果～

### 3.1. 高齢者のいる世帯の類型化と就業構造

表3は「世帯調査」をまとめたものである。多世代夫婦家族（A型）が10戸、一世代夫婦家族（B型）が7戸、独居（C型）が3戸の構成である。また、後継者の現状によって、20歳未満の子供のみ（Ⅰ）、20歳以上の後継者がいる（Ⅱ）、後継者他出（Ⅲ）に分けて、家族形態を示している。表は家族形態別に世帯主年齢が若い順番に並べている。

A型では、主な収入源は農外従事や農業・畜産である。若い世代と同居し、世帯主も次世代に移行しているので、若い世代の収入が主な収入源であり、年金は副次的収入、あるいは小遣いの収入である。自家農林業以外の就業先としては、役場や農協、会社など恒常的勤務が多い。また、聞き取り調査によると多世代夫婦家族では親世代と子世代の夫婦家族で家計を分担している世帯がみられた。それらの世帯では年金は副次的収入となっている。親世代の一方が欠損（死亡）すると、年金は小遣い程度となる（A-8～10番）。

B型では、一戸が独身後継者と同居し世帯主も交代しているが（B-1番）、他の6戸は後継者が他出している高齢者2人世帯（B-Ⅲ形態）である。B-Ⅲ形態において、世帯主が前期高齢者である4戸は林業や畜産経営、あるいは森林組合で就業しており、年金は副次的収入である。世帯主が後期高齢者となった2戸では年金が主な収入源であり、自家農林業が副次的収入となっている。また、B形態では7戸全てで「リサーチ出荷」と呼

表3 高齢者のいる世帯の家族形態と就業・家計構造  
Table 3. A family make-up, employment and economy in households having aged member

| 世帯番号 | 家族形態  | 世帯主年齢(歳) | 家族人数(人) | 高齢者  | 農林業経営、<br>主な栽培作物 | 主な収入源 | 副次的収入  | リサーチ出荷 | 林業労働 | 自家農林業<br>以外の就業  | 年金の意義 | 年金受給額<br>(万円) | 年金受給状況            |
|------|-------|----------|---------|------|------------------|-------|--------|--------|------|-----------------|-------|---------------|-------------------|
| A-1  | A-I   | 43       | 6       | 2    | 肉牛繁殖<br>特用林産物    | 農外賃金  | 畜産     | -      | -    | 役場              | 小遣いの  | 60            | 国年                |
| A-2  | A-I   | 45       | 7       | 2    | 肉牛繁殖             | 畜産    | その他    | ○      | -    | 農協              | 副次的収入 | 430           | 厚年、農年             |
| A-3  | A-I   | 45       | 7       | 2    | 自家野菜             | 農外賃金  | 年金     | ○      | -    | 役場              | 副次的収入 | 110           | 国年(2人)            |
| A-4  | A-II  | 48       | 5       | 2    | 自家野菜             | 農外賃金  | 農業     | -      | ▲    | 建築会社            | 副次的収入 | 185           | 国年(2人)、<br>農年     |
| A-5  | A-II  | 61       | 6       | 2    | 野菜・<br>特用林産物     | 農業    | その他    | ○      | ○    | その他             | 小遣いの  | ?             | 国年(2人)            |
| A-6  | A-II  | 61       | 7       | 2    | 肉牛繁殖             | 農外賃金  | 農業     | -      | ●    | 会社員             | 副次的収入 | 100           | 厚年、国年             |
| A-7  | A-II  | 66       | 8       | 3    | 林業<br>(森林組合)     | 林業    | 農業     | ○      | ○●   | 役場              | 副次的収入 | 200           | 国年(3人)            |
| A-8  | A-III | 45       | 3       | 1    | 特用林産物            | 農業    | 林業     | ○      | -    | -               | 小遣いの  | 45            | 国年                |
| A-9  | A-III | 56       | 3       | 1    | 野菜・稲作            | 農業    | 日雇いパート | ○      | -    | 製材所             | 小遣いの  | 35            | 国年                |
| A-10 | A-III | 58       | 3       | 1    | 自家野菜             | 農外賃金  | 農業     | -      | -    | 木材関連            | 小遣いの  | 50            | 国年                |
| B-1  | B-II  | 43       | 3       | 2    | 野菜経営             | 農業    | 日雇いパート | ○      | -    | その他             | ?     | ?             | 国年(2人)            |
| B-2  | B-III | 66       | 2       | 2    | 自家山林(雇用)         | 林業    | 年金     | ○      | -    | -               | 副次的収入 | 200           | 国年、厚年、<br>議員年金    |
| B-3  | B-III | 66       | 2       | 2    | 肉牛繁殖             | 畜産    | 年金     | ○      | ▲    | -               | 副次的収入 | 60            | 国年                |
| B-4  | B-III | 70       | 2       | 2    | 林業<br>(森林組合)     | 林業    | 年金     | ○      | ○    | 森組              | 副次的収入 | 200           | 国年(2人)、<br>厚年(2人) |
| B-5  | B-III | 72       | 2       | 2    | 肉牛繁殖・<br>特用林産物   | 畜産    | 年金     | ○      | ○●   | 森組              | 副次的収入 | 50            | 国年(2人)、<br>厚年     |
| B-6  | B-III | 76       | 2       | 2    | 自家野菜             | 年金    | 農業     | ○      | -    | -               | 主な収入源 | 140           | 国年(2人)            |
| B-7  | B-III | 79       | 2       | 2    | 特用林産物・<br>稲作     | 年金    | 農業     | ○      | ○●   | -               | 主な収入源 | 130           | 国年(2人)、<br>厚年     |
| C-1  | C-III | 76       | 1       | 1(女) | 自家野菜中心<br>椎茸     | 年金    | リサーチ   | ○      | -    | -               | 主な収入源 | 90            | 国年、恩給             |
| C-2  | C-III | 78       | 1       | 1(女) | 自家野菜             | 年金    | (貯金)   | -      | -    | -               | 主な収入源 | 60            | 国年                |
| C-3  | C-III | 79       | 1       | 1(男) | なし               | 年金    | 日雇い    | -      | -    | 森林組合加工<br>工場・大工 | 主な収入源 | 65            | 国年                |

資料：「世帯調査」結果より作成。

注：①家族形態は、A…多世代夫婦家族、B…一世代夫婦家族、C…独居、I…20歳未満の未婚者のみ、II…20歳以上の後継者あり、III…後継者他出を示す。

②国年…国民年金、厚年…厚生年金、農年…農業者年金

③林業労働欄で、●は自家山林での就業、○は雇われ又は請負就業、▲は不在村所有山林の管理

ばれる農産物産直への出荷がなされている（詳細は後述）。

C型3戸は全て後継者が他出し、B-III形態であったが、一方に先立たれ独居に至ったC-III型である。いずれも後期高齢者であるが、健康である。年金が主な収入である。C-3番は20年前からの男性独居世帯であるが、若い頃大工の見習い時代に家事の経験があり、不自由なく自活されている。

### 3.2. 年齢別にみた世帯員の就業と年金受給状況

世帯調査を実施した30戸において20歳以上の世帯員の農林業従事及び所得について概観し、高齢期の特徴点を把握する。

#### 3.2.1. 男性世帯員

表4は男性世帯員を年齢別に分類したものである。20～30代7名は農林業にはほとんど従事しておらず、年間農林業従事日数は0日が3人、49日以下が2人、200日以上が1人で

ある。49日以下の世帯員はコメなどの収穫期に手伝いをしている。200日以上は専門的に農業に従事し、コメと野菜その他を作っている。また、0日や49日以下は月給制の恒常的勤務に従事している人が多い。40～54歳は農林外従事中心と農業専門の2つのタイプがみられる。雇用者7人のうち5人が月給制である。200以上の5人のうち2人が新規就農者で菌床椎茸を栽培している。また、1人は自家山林経営を行っているが、この年代では林業を行っている人はあまり見られない。55～64歳は49日以下が1人、150～200日が1人、他の3人は200日以上農林業に従事している。200以上の3人のうち、1人は新規就農者でサラダ菜生産、残りの2人はコメ、夏秋キュウリ、特用林産物を生産している。それに加えて2人のうち1人は牛と林業労働、もう1人は自家山林経営という農林複合の就業形態である。

表4 男性世帯員の存在形態  
Table 4. An existence of male family members

(単位：人)

|                   | 39歳以下 | 40～54歳 | 55～64歳 | 65～75歳 | 75歳以上 | 計  |
|-------------------|-------|--------|--------|--------|-------|----|
| 総人数               | 7     | 11     | 5      | 11     | 7     | 41 |
| 自家農林業従事人数         | 4     | 10     | 5      | 10     | 5     | 34 |
| 年間49日以下           | 2     | 4      | 1      | 1      | 4     | 12 |
| 50～99日            | -     | 1      | -      | -      | -     | 1  |
| 100～149日          | -     | -      | -      | -      | -     | 0  |
| 150～199日          | -     | -      | 1      | 1      | -     | 2  |
| 200日以上            | 1     | 5      | 3      | 7      | 1     | 17 |
| 日数不明              | 1     | -      | -      | 1      | -     | 2  |
| 作物別作業実施人数         |       |        |        |        |       |    |
| 米                 | 3     | 6      | 5      | 8      | 5     | 27 |
| 施設野菜              | 1     | 4      | 3      | 3      | -     | 11 |
| 路地野菜              | -     | -      | -      | 3      | 1     | 4  |
| 特用林産物<br>(うち菌床椎茸) | -     | 3      | 3      | 6      | 4     | 16 |
| 畜産                | -     | 2      | -      | -      | -     | 2  |
| 自家林業              | -     | 1      | 3      | 5      | -     | 9  |
| 林業請負              | -     | 1      | 2      | 4      | 3     | 10 |
| 林業請負              | -     | -      | 2      | 4      | -     | 6  |
| リサーチ出荷            | -     | -      | -      | -      | -     | 0  |
| 賃労働勤務             |       | 6      | 7      | 3      | 2     | 1  |
| 月給制               | 5     | 5      | 3      | -      | -     | 13 |
| 出来高制              | 1     | -      | -      | 1      | -     | 2  |
| 日給制               | -     | 2      | -      | 1      | 1     | 4  |
| パート               | -     | -      | -      | -      | -     | 0  |
| 年金受給者             | -     | -      | 1      | 11     | 7     | 19 |
| うち国民年金のみ          | -     | -      | -      | 5      | 7     | 12 |

資料：前表と同じ。

注：不在村所有山林の管理も自家農林業に含めている。

65～75歳の前期高齢者では11人のうち10人が農林業に就業し、うち8人は150日以上である。作物別にみると多いのはコメ以外には特用林産（椎茸やワサビ）と牛である。自家山林経営や林業請負も4人ずつみられる。11人全てが年金受給者でありうち5人は国民年金のみである。

75歳以上の後期高齢者（7人）では農林業従事者及び従事日数が減少し、2人は未就業、49日以下が4人、200日以上1人である。作物別にみるとコメの他に特用林産物（ワサビ）が3人と多い。林業に関しては自家山林の手入れを3人が行っている。80歳で不在村所有山林の管理をしながら、そこで沢ワサビを生産している人もいる。年金は全員が受給しているが、いずれも国民年金のみである。

表5 女性世帯員の存在形態  
Table 5. An existence of female family members

(単位：人)

|           | 39歳以下 | 40～54歳 | 55～64歳 | 65～75歳 | 75歳以上 | 計  |
|-----------|-------|--------|--------|--------|-------|----|
| 総人数       | 10    | 10     | 9      | 9      | 7     | 45 |
| 自家農林業従事人数 | 5     | 8      | 8      | 6      | 5     | 32 |
| 年間49日以下   | 2     | 1      | -      | 2      | 2     | 7  |
| 50～99日    | -     | -      | -      | -      | 1     | 1  |
| 100～149日  | -     | -      | 2      | -      | -     | 2  |
| 150～199日  | -     | 1      | 1      | -      | -     | 2  |
| 200日以上    | 2     | 6      | 4      | 4      | -     | 16 |
| 日数不明      | 1     | -      | 1      | -      | 2     | 4  |
| 作物別作業実施人数 |       |        |        |        |       | 0  |
| 米         | 3     | 4      | 7      | 4      | 2     | 20 |
| 施設野菜      | 3     | 5      | 5      | 2      | -     | 15 |
| 路地野菜      | 3     | 6      | 8      | 6      | 5     | 28 |
| 特用林産物     | -     | 4      | 4      | 3      | -     | 11 |
| （うち菌床椎茸）  | -     | 2      | 1      | -      | -     | 3  |
| 畜産        | -     | 2      | 5      | 1      | -     | 8  |
| 自家林業      | -     | 1      | 3      | 1      | 1     | 6  |
| 林業請負      | -     | -      | -      | -      | -     | 0  |
| リサーチ出荷    | 2     | 6      | 6      | 6      | 4     | 24 |
| 賃労働勤務     | 6     | 3      | 1      | -      | -     | 10 |
| 月給制       | 4     | -      | 1      | -      | -     | 5  |
| 出来高制      | -     | -      | -      | -      | -     | 0  |
| 日給制       | -     | 1      | -      | -      | -     | 1  |
| パート       | 2     | 2      | -      | -      | -     | 4  |
| 年金受給者     |       | -      | 2      | 8      | 7     | 17 |
| うち国民年金のみ  | -     | -      | 2      | 6      | 5     | 13 |

資料：前表と同じ。



### 3.2.2. 女性世帯員

表5は女性世帯員の実態を示している。

20～30代では、10人のうち5人は自家農林業に全く関わっておらず、2人は農繁期に手伝い程度である。そのほとんどは自営以外の賃労働に勤務している。200日以上農業に従事する2人は施設野菜の生産をしている。40～54歳では10人のうち7人が150日以上、専業的自家農業に従事している。うち2人が新規就農者で菌床椎茸生産者である。夫は恒常的勤務で妻が主に農業（キュウリやエノキ、畜産など）に従事して、切り盛りしている女性が3人いる。55～64歳では9人のうち月給制の勤務している1人を除いて、8人が100日以上自家農林業に従事している。また、6人が路地野菜等を「リサーチ出荷」し、自家農林業にも3人が従事している。

65～75歳の前期高齢者では、9人のうち6人が自家農林業に従事し、4人は200日以上である。「リサーチ出荷」用と自家用をかねて野菜をつくっている人が多い。農業で生計をたてるにはいろいろな種類の葉物を作ってもお金にはならないが、「リサーチ出荷」では多くはないが収入になり、楽しみとなっている。

75歳以上の後期高齢者になると男性同様に就業者数と就業日数が減少し、7名のうち5名は路地野菜を栽培し、4人が「リサーチ出荷」を行っている。「リサーチ出荷」者は若い世代の人にもみられるが、特に高齢者が熱心に行っている。

## 4. 高齢者の就業とライフコース～「副業調査」の結果～

上津江村では高齢者の多くが男性では林業労働を担い、女性は「リサーチ出荷」と呼ばれる農産物産直販売を実施している。本節では「副業調査」の分析を行いこれらの副業の役割について考察する。

### 4.1. 男性高齢者の林業労働の実態

表6は林業労働4人、不在村所有山林の管理2人の調査結果を示している。4人のうち3人が70代で年金をもらっているが林業労働を続けている。作業は3人が下刈り中心であり、D氏は間伐まで請け負っている。当地は1991年の19号台風で甚大な被害を受けたため、現在、その跡地造林地の多くが下刈り時期となっている。B氏は請負親方として4～5人（全て65歳以上）をまとめて第三セクター「トライウッド」から造林、下刈りを請け負っている。年々仕事量が増加している。

林業労働の開始年は4人とも30～40年前であり、「生活の足し」（D氏）として始められている。雇用形態は共同で請負となっている。年間従事日数は50～150日である。4氏は林業労働以外にも、米やわさび、椎茸など比較的労力の少ない作物を作っている。年間収入（経費込み）は40万～200万円と人によってもさまざまである。家計や自分にとっての位置づけは主に夫婦2人分の家計の足しとなっている。4戸ともA～I世帯であり、食費などは子夫婦と共同家計であるがその他の交際費や趣味代は分担されている。いつまで続けるかは「今後も続ける」（A氏）、「ずっと続ける」（D氏）などのように4人とも健康である限り続けたい意向である。しかし、「今から10年続けたいが無理かも」（C氏）や「4,5年が限界」（D氏）のような意見も聞かれる。Bの共同作業も「66～67歳くらい」で

表6 男性高齢者の林業労働従事の実態  
Table 6. The actual conditions of male aged forestry workers

|                | 林業労働                           |                         |   |                             | 不在村地主の所有山林管理                           |                         |
|----------------|--------------------------------|-------------------------|---|-----------------------------|--|-------------------------|
|                | A                              | B                       | C                                       | D                           | E                                      | F                       |
| 年齢             | 64                             | 72                      | 72                                      | 72                          | 70                                     | 79                      |
| 家族・家計形態        | A-I<br>わさび・林業中心。               | A-I<br>農林業中心、小遣いは自分で稼ぐ。 | A-I<br>農林業中心、後継者がいるからいいが2人なら年金だけではむ。    | A-I<br>自分たち夫婦では椎茸・下刈り+年金。   | A-I<br>農林業+ $\alpha$ 。                 | B-III<br>年金+ $\alpha$ 。 |
| 開始年            | 30年前。                          | 30年前。                   | 40年前から。                                 | 40年前。                       | 若い頃から。                                 | S30~H8まで。               |
| 開始理由           | 農業+ $\alpha$ 、森林組合をやめて一人親方に。   | 父の代から林業で食べてきた。          | 先祖代々、主な生計手段。                            | 生活の足しに。                     | 父の代から引き継いでいる。                          | 近所。                     |
| 雇用形態           | 請負(4,5人共同)。                    | 請負(4,5人共同)で、面積請け。       | 請負(4,5人共同)。                             | 請負(4人)で、日当。                 | 以前は仕事量に応じた賃金、今は監視のみなのでなし。              | 日雇い賃金。                  |
| 勤務先            | 森林組合、役場、不在村地主                  | トライウッド(3年前から)           | 森林組合                                    | 森林組合、近くの山。                  | 小国の不在村地主(150ha)の山管理。                   | 日田の不在村地主(70ha)の山管理。     |
| 従事内容           | 下刈り                            | 下刈り・造林中心。               | 下刈り中心、2,3年前に造林もした。                      | 下刈り・間伐など。                   | 造林・下刈りから伐採まで経営委託。                      | 今は監視程度。                 |
| 年間従事日数         | 80日                            | 150日                    | 150日(夏7~10月)                            | 50日                         | 2日                                     | 2日                      |
| 年間収入(経費込み)     | 70万円                           | 200万円                   | 150万円                                   | 40万円                        | お礼程度                                   | お礼程度                    |
| 仕事量増減          | あまりかわっていない。人がいないからやってくれと頼まれる。  | 人手不足なので年々増えている。         | 若い頃は多かった。                               | 変わらない、しいたげに力を入れる。           | 減少。                                    | 今はなし。                   |
| 家計・自分にとっての位置づけ | 家計の足し、時間の融通が利くのでよい。            | 生活費は主に若夫婦、旅行代に使う。       | 食費などは若い世代に出してもらい、その他交際費、税金、保険料は自分たちで出す。 | 今では自分たち夫婦の一番の収入。            | 生活費の足し、地元の人に仕事を提供できる、近くにあるので農業と一緒にできる。 | 昔は所得の柱。                 |
| いつまで続けるか       | 今後も続ける。70歳ぐらいまでは、わさびもしくてはならない。 | 旅行できる限り、健康が続く限り。        | 健康であれば、今から10年続けたい。                      | あと5年が限界、家の近くにある山林はやらないと荒れる。 | 元気なうちは管理を続ける。作業はトライウッド、森林組合に委託。        | 今はやめた。監視だけしている。年をとったから。 |

資料:「副業調査」結果より。

あり、「77歳の人もいたが今年からはやっていない」(B氏)となっている。聞き取り調査の中で「65ぐらいから70代前半は結構いるがそれ以上の年齢の人はほとんどいない」という意見も聞かれた。よって、70代前半が林業労働の限界となっているようである。

次に不在村地主の所有山林管理を行っているE氏は70歳とF氏は79歳である。F氏は3,4年前まで管理を行っていたが高齢のため、今は監視のみである。75歳くらいまで年金+ $\alpha$ として行われていた。E氏も昔は管理していたが今では経営管理のみで作業はトライウッドや森林組合に委託している。2人とも作業を自分で行っていたときの報酬は日当であったが、今は監視のみであり、お礼程度の収入である。

#### 4.2 農産物産直事業(「リサーチ出荷」)の展開

「リサーチ出荷」は農産物直売所「木の花ガルテン」への農産物の出荷である。「木の花ガルテン」は上津江村から車で約30分の筑後川支流沿いに位置する大山町の農協が経営し、

1990年7月に大山店がオープンした。販売品は取れたて農産物、農産加工品、手工芸品などである。大山町は平地農村に比べて条件が不利であることから「少量生産」「多品目販売」「希少価値販売」という考え方を打ち出し、農協を中心に町おこしをすすめてきた。直営店オープン以降、農産物の売れ行きがよく、大山町にある直営店の他、1992年に福岡市長住店、1993年に福岡市松崎店、1995年に大分市松野店、2000年に大分市植田店がオープンし、出荷店舗を拡大してきた。店舗増設にともなって販売物が不足し始め、近隣市町村にも出荷が呼びかけられた。現在では上津江村含め日田市郡から出荷が行われている。年間を通じて出荷農産品は480品目、出荷数量は350万～400万点になっている。生産者は約1,800人に及んでいる。

また、出荷形態も特徴的である。生産者は値段や出す店舗、販売物などを自分で指定することができる。販売物には名前を書いたシールを貼ることになっており、生産者の顔が見えるようになっている。包装なども個人の裁量で工夫でき、生産者女性にとって楽しみの一つとなっている。生産者は登録時に個人名義の口座を作ることになっている。販売額の2割は手数料として農協に支払われ、残りの8割が口座に振り込まれる。「木の花ガルテン」の売り上げは、1993年の220百万円から1998年595百万円へと着実に伸びている。

上津江村では2000年において、「木の花ガルテン」への出荷者は100人、総売り上げが37百万円となっている。98年以前には個人で大山農協まで出荷していたが、1997年から「リサーチ出荷」と称して、村の事業として役場によって集荷が担当されるようになった。それ以降「リサーチ出荷」を始めた人も多い。役場の集荷は各集落を2週間に3回まわるように計画されている。最初は集荷を軽トラックで行っていた。しかし、出荷量が増加して軽トラックでは1回で運搬できなくなった。そのため、2tトラックが使われるようになっていく。 「リサーチ出荷」関係の反省会もあり、最近では活発な議論が行われている。農協によって福岡・大分店への見学旅行も行われている。「木の花ガルテンのトラックが来るのを多くの消費者が都会の店舗で待っていた」（聞き取り調査より）ことは出荷者によって大きな励みとなっている。

#### 4.3. 女性高齢者の産直農産物生産の実態

次に、「リサーチ出荷」に取り組んでいる女性5人の実態をみておきたい（表7）。

年齢は50～78歳とさまざまである。家族形態は5人のうちA-Iが2人、B-IIIが3人となっている。また、A-I世帯は「食費以外は自分で。息子とは家計を分担」（G氏）のように食費以外の支出は自分で負担している。そのためには「年金だけではちょっと足りない」（G氏）や「後継者がいるからよいが2人なら年金だけではむり」（J氏）のように年金+αが必要とされている。「リサーチ出荷」を始めた年は、5人のうち3人は役場が集荷を始めた1997年である。役場の集荷は「リサーチ出荷」の広まりに大きく貢献している。2人は役場が集荷を開始する前から、「木の花ガルテン」への出荷を始めている。「リサーチ出荷」に出す作物はさまざまである。特にG、H、K氏の3人は畑でいろいろなものを作っている。これは「リサーチ出荷」用と自給用を兼ねている。50代のI氏はキュウリの専業農家であり、農協の規格外品を主に販売している。その他、山村特産の山でとれるものもよく出荷されている。価格は個人で設定できるが他の人のものをみて決められており、基本的に100円から200円の設定が多い。季節ものや珍しいものは少し高めに設

表7 女性による産直用農産物生産の実態  
Table 7. The actual conditions of agriculture for direct transactions by female

|                 | G  | H  | I  | J                                  | K   |
|-----------------|--|--|--|------------------------------------|---|
| 年齢              | 78   | 70   | 50   | 63                                 | 78  |
| 家族家計形態          | A-I<br>息子とは分担型家計、年金だけでは足りない。   | B-III<br>年金+a(わさび、しいたけ)。   | B-III<br>農業中心(きゅうり)。   | A-I<br>農林業中心。                      | B-III<br>年金+a。  |
| 開始年             | 1997年  | 1994年  | 1992年  | 1997年                              | 1997年   |
| リサーチ出荷に出している作物  | ばれいしょ、いもから、生椎茸、みずいも、さといも、かぼちゃ、かぼす。大根、葉ししとう、みょうが、ねぎ、ピーマン、オクラ、きく、花、モロヘイヤ、パセリ、山椒の葉など、20種類ぐらい。 | 椎茸、みょうが、さんしょう、ししとう、さといも、はすいも、うど、ミニ大根、はつか、ターサイ、チンゲン菜、みずな、ネギ、いんげん、こしょう、ピーマン、ししとうなど。他にも薬物を少しずつ、ネギは作りやすい。夏やお盆前には花が売れる。 | きゅうり、かぼちゃ、ゆず、椎茸、みょうが、山椒の葉、ねぎ、ほうれん草、小松菜、わらび、たけのこ、たらのめ、うどなど。           | ピーマン、なすび、花など。                      | ミョウガの葉、青じそ、ピーマン、インゲン、オクラ、なす、もち米、ヤナギ寒椿、大豆、カミシバ、ふきのとう、小豆、いも、里芋、その他いろいろ。畑でいろいろなものを作って、季節ごとにとれるものを出す。山のものも結構売れる。都会にはないもの。 |
| 平均単価・販売量        | 100円ぐらい。1回に30~40袋。   | 100~200円。1回に40~50袋出す。  | 100円になるようにする。季節的に珍しいものは最初200円にしてその後150円、100円と値下げ。                    | 100円。たまに50円も。                      | 100~200円。季節ものでは300~500円のものも。  |
| 月間販売額           | 月1.5万円程度。  | 月3万円程度。  | 月4万円程度。  | 月2千円程度。                            | 月2万円程度。   |
| 開始年以降の販売量の増減    | 変化なし。  | 増加   | 増加。  | 減った。子守と母の介護のため。                    | だんだん増えている。  |
| リサーチ出荷をして良かったこと | お金になるからよい。元気に働いていると健康に繋がる。忙しいのでテレビを見たり、やすらぎ苑に行く暇はない。                                       | いろいろ作ることが楽しい。以前は余ったりにあげたりしていたが、お金になる。粗末にならない。  | 自分の口座に入ることが楽しみ。きゅうり農家で収穫時期にはたくさんとれる。規格外品を人にあげても食べきれない。今は捨てなくてすむのがよい。 | 楽しみ。うちで食べない分など余ったものを出す。何もしないよりはいい。 | 少しでも所得になり楽しみ。小遣いになる。捨てていたものが少しでもお金になるのが楽しみ。   |
| 家計・自分のとっての位置づけ  | 自分の小遣いや貯金(葬式代、病院代)。  | 通帳にたまっていくのが楽しみ。ほけ防止。たまに旅行に使う。  | 結構大きな収入。家計と一緒に使う。  | 自分の口座にはいるので楽しみに少しずつ使うほど。孫に小遣い。     | 小遣い程度。  |
| 今後の出荷予定         | できる限りは続ける。   | 元気で、できる間は続ける。リサーチ出荷ができなくなった時は働けなくなったとき。  | ずっと続けていく。  | 出せるときは出していく。                       | ずっと続ける。健康のため。体の続く限りは。   |

資料:「副業調査」結果より。

定される。月間平均販売額も2千円~4万円までと各人の事情によって異なっている。

5人の中では最も若い50歳のI氏が最も多く、月平均4万円を売り上げている。しかし、78歳のK氏も2万円の収入を上げている。家族形態がB-III世帯(H, I, K氏)は月2~4万円と比較的販売額が大きい。販売量は3人が増加している。しかし、J氏は「子供と母の世話で忙しい」ため販売量が減っている。

「リサーチ出荷」をして良かったこととして、「口座にはいることが楽しみ」「少しでも所得になる」「いろいろ作ることが楽しい」などの意見があげられている。「リサーチ出荷」は楽しみや生きがいとしての役割が大きい。また、「捨てなくてすむ」「粗末にならない」などの意見も聞かれる。特にI氏はキュウリ農家であり、「収穫期にはたくさんとれる。規格外品もたくさん出るが人にあげても食べきれない。以前は捨てていた。今は『リサーチ出荷』して捨てなくてすむのがよい」のように、捨てなくてすむうえに少しの収入にもなるところが高く評価されている。

販売額があまり大きくないので個人にとっての小遣い的な側面が大きい。「通帳にたま

っていくのが楽しみ」(H氏)のように貯金の楽しみもある。I氏は販売額が少し大きい  
ため、家計の副収入として扱われている。今後の予定としては続けていく意向が多い。忙  
しいJ氏も「出せるときは出していく」としている。「リサーチ出荷ができなくなったと  
きは働けなくなったとき」(H氏)のような意見もみられる。「リサーチ出荷」は大きな収  
入にはならないがかなり高齢でも可能な就業となっている。

以上、農産物産直である「リサーチ出荷」は林業労働よりも収入としては小さく、特  
に高齢者にとっては家計の足しとしてよりも楽しみや生きがいとしての役割が大きいこと  
がわかった。また、林業労働収入は使うための収入であったが、「リサーチ出荷」収入は貯  
める楽しみとしての側面も持っている。A-I世帯では「リサーチ出荷」の収入は少額で  
あるため、主に自分の楽しみとして使われている。しかし、B-III世帯では販売額が比較  
的大きく、楽しみとしての側面も大きい年金+ $\alpha$ としても重要な役割も持っている。ま  
た、70代後半でも月2万円の収入を上げている人もいるため、林業労働に比べると、年齢  
の限界が遅いといえる。

## 5. まとめ～高齢者のライフコースと地域振興の課題～

### 5.1. 高齢者のライフコースと農林地管理問題

以上のような考察から、高齢期のライフコース変化をまとめると、図1のように示すこ  
とができる。60代前半までは若い世代の人とあまり変わらないぐらい農林業に従事して  
いる。この時期はキュウリなどの労力の大きい作物も生産されている。前期高齢者(65~75  
歳)になると従事日数が若干減少し、男性では週4,5日程度、女性では週2,3日程度となる。  
後期高齢者ではさらに農林業従事日数が減少し、男性は週2,3日ほどになり、女性では畑  
仕事などが少し行われる程度になる。80代以降になるとほとんど農林業は行われない。林  
業労働は60代後半までは造林・下刈り・伐採なども行われているが、70代前半には下刈り  
中心となる。「リサーチ出荷」は比較的労力が少なく、70代後半でも続けられている。よ  
って、農林業の意義について考えてみると、60代前半までの農林業は主な家計収入と位置  
づけられる。65歳以降年金をもらうことにより、前期高齢者では年金+ $\alpha$ の小さい就業形  
態がみられる。後期高齢者になると体力的にも限界があり、生きがいとして畑仕事などの  
簡単な農林業が営まれる。これら副業は、金銭的には少ないが、高齢者の健康面や生活の  
張りという面で大きな役割を果たしている。同時に農林地の管理という面からも位置付け  
直す必要がある。

高齢期には前期高齢者である60代後半から農林業従事日数が減少し、後期高齢者の70代  
後半が農林業の限界であることがわかった。若い世代では農林業従事者が減少しており、  
若い専門的な担い手作りと同時に50代以上の農林業従事者が主体となって村の農林業を担  
える仕組み作りが必要だといえよう。2000年に設立されたシルバー人材センターや農業公  
社の取り組みに期待したい。

また、所有農地や林地について、後継者が他出している場合には、相続後の管理が問題  
となる。例えば、世帯調査のC-2番では既に山林(6ha, スギ35年生)の名義は熊本に  
いる他出後継者(42歳, 既婚)になっている。世帯主(78歳, 女性)は「自分がいなくな  
れば境界も分からなくなるのではないかと心配している。管理受託も含めて不在村化す

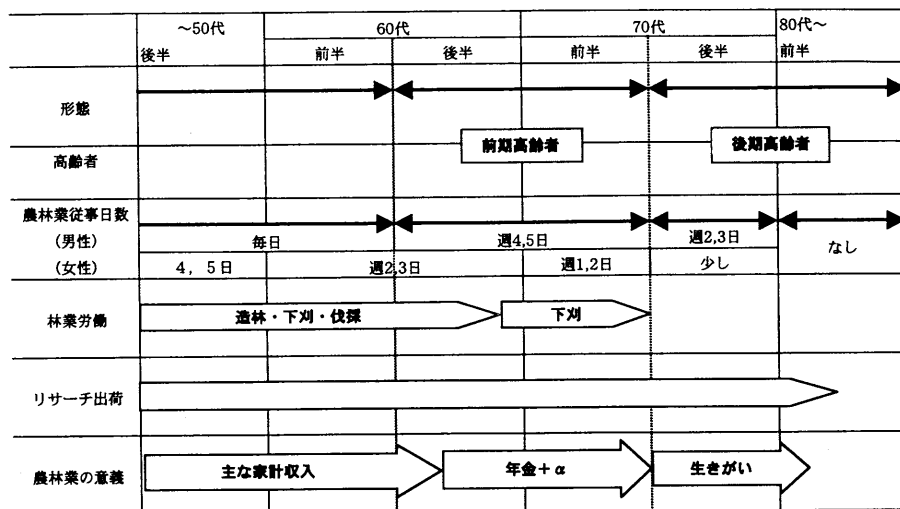


図1 高齢期のライフコース変化  
Fig.1 Changes in the aged life course

る農林地の保全が大きな課題である。

## 5.2. 高齢者の生活問題について

「世帯調査」及び「副業調査」においては買い物や医療、福祉面での不安や行政に対する要望に関する調査を行った。特に、後期高齢者の独居世帯や夫婦2人世帯に対する結果についてまとめておく。なお、聞き取り調査の受入が可能な世帯を任意で抽出したということもあって、今回の調査では病院には通っているという事例はあったものの、介護が必要という高齢者ではないことは留意しなければならない。

「年金だけではちょっと足りない」という現状はあるが、「リサーチ出荷」や林業労働などの年金+αの就業ができれば、経済的に生活は可能であるといえる（逆に年金だけでは不十分だということではあるが）。

また、3人の独居世帯では月に数日間「友達に会いに」、村営の介護支援センター「やすらぎ苑」のデイサービスに通っている。買い物はスーパーの移動販売や生協で済ませ、通院などで用事がある時は枝道まで入るタクシー形式の村営バスを利用している。日常生活面で困るということは聞かれなかった。

また、調査をした独居高齢者の子供（長男とは限らない）は村内又は近隣市町村（日田市、熊本市）に住んでいて、休日には遊びに来るといふ。しかし、「いっしょに住もうというので、一週間息子のところに行ってみたが、三日もしたら帰りたくなった」（C-2番）や「元気ならば一人の方が気ままでよい」（C-3番）などが聞かれた。将来の不安として介護が必要となった時にどうするかというはあるが、健康であれば一人暮らしででも山村に暮らしたいという意向である。

## 5.3. 高齢化段階での自治体の役割

こうした高齢者の生活は、「リサーチ出荷」の体制作り、シルバー人材センター、村営バス、やすらぎ苑の運営、農業公社の設立、介護保険料の一部減免措置など、多くの部分

で村が独自予算を組んでいることに支えられている。上津江村では90年代にハード事業も集中して取り組まれたため、今後、歳出に占める借入金返済が増加することは確実である。また、村財政の柱である交付税の算定方法が見直されるなど、歳入の減少も現実のものとなっている（詳しくは佐藤，2001）。こうした中で、村営バス料金が2001年度から値上げに踏み切ったところである。

こうした財政状況と今後更に進行する高齢化を前提として、どの分野にどのような支援策が必要か、という再点検も不可欠になってこよう。一方、グローバル経済化が進行する中で、農林産物の価格低下や雇用不安が急速に広がっており、地域において安心して暮らせていけるセーフティーネットの構築も急務となっている。

以上のような様々な課題を山村は内包している。本稿の分析によって、高齢者が山村地域社会に果たしてきた役割を再認識し、「元気な高齢者」作りと地域振興への参加という視点が今後の山村問題を考える上で重要であることが明らかとなった。

## 引用・参考文献

- 井岡 勉（1997）：過疎地域における地域福祉の状況と課題，評論・社会科学57：1-48
- 井上和衛（2001）：定年農業者の動向と生産活動，農業と経済67-2：62-70
- 小川全夫（1992）：中山間地域の生活問題～高齢者を中心に～，今村奈良臣監修 中山間地域研究，農林統計協会，東京，p.40-53
- 佐藤宣子（2001）：大分県上津江村の経済と歩み～現段階の山村問題～，林業経済628：5-8
- 染谷淑子（1997）：過疎地域の高齢者～鹿児島県下の実態と展望～，学文社，東京，p.1-185
- 高野和良（1998）：過疎農山村社会における生活構造と地域課題，山本努他 現代農山村の社会分析，学文社，東京，p.76-92
- 玉里恵美子（1998）：地域介護ネットワークシステムへの展望と課題～要援護高齢者の在宅生活の可能性について～，村落社会研究34・山村再生21世紀への課題と展望，農文協，東京，p.66-95
- 徳野貞雄（1998）：少子化時代の農山村社会～「人口増加型パラダイム」からの脱却をめざして～，山本努他 現代農山村の社会分析，学文社，東京，p.138-170
- 徳野貞雄（2001）：農村社会の持続と定年農業，農業と経済67-2：48-61

付記：本稿の一部は2000年度林業経済学会秋期大会で口頭報告を行ったものである。また、調査は「上津江村第四次総合計画」策定作業の一環として行ったものであり、調査団長であった村田武九州大学農学研究院教授には記してお礼申し上げる。また、調査に協力を頂いた上津江村の方々にお礼申し上げたい。

（2001年12月5日受付；2002年1月28日受理）

## Summary

The ageing of mountain villages' population has made rapid progress, and has been considered as a cause of the incidence of troubles. Consequently, high ratio of the aged to total population is widely used as an indication of the lowering of rural activity. But actually the aged are substantial persons in charge of agriculture and forestry, and they perform various important parts in rural development made efficient use of regional resources, such as proceeding agricultural goods and traditional events. Now it is needed to investigate the actual conditions of the aged in mountain villages.

In this paper, using two case studies on Kamitsue village in Oita, where the ratio of the aged reached 35% in 2000, we typified the aged actual conditions. In Japan, "the aged" signifies person of 65 years old and over on census. But between the lower aged (65-74) and the later aged (75-), there were different structures on jobs, income resource, life style and so on. And their attitudes towards avocations and their importance were distinguished by their household's form. The big avocations as income resource without national pension were forestry works for male, and direct transactions of agriculture products for female.

But it has been got into difficulty for the only aged to preserve cultivated land and forest suitably. Therefore new alternative land care system is needed in mountain villages.

**Key Words:** mountain villages, ageing society, direct transactions of agriculture products, rural development, resources management